

特別企画

関東大震災と土木技術者 100年



帝国地方行政学会製
「東京復興計画大地図附・新地図並一覧表」
(国会図書館デジタルコレクション)

関東地方に甚大な被害をもたらした関東大震災から、今年で100年の節目を迎えます。震災後、公園・橋・道路などのインフラが次々と整備され、東京の街は活気を取り戻していきます。急速な復興の影には、街づくりに尽力した土木技術者たちの姿がありました。

被災状況と帝都復興事業

1923(大正12)年9月1日午前11時58分。突然、巨大な揺れが東京一帯を襲った。そしてその日の午後には、東京市内70余か所から火の手が上がった。辺り一面火の海になり、煙が広がった。その被害は東京だけではなく、神奈川、千葉、埼玉、静岡、山梨、茨城の1府6県にも及んだ。家屋の全焼は38万余強、死者行方不明者数は約350万人。瞬間に焦土と化した東京を「復旧」ではなく「復興」しようと提唱したのが後藤新平であり欧米最新の都市計画を採用し、わが国にふさわしい新都を造る「帝都復興事業」が始められた。

日本の公園緑化の父

折下 吉延



関東大震災前、東京市内には27の公園しか存在していなかったが、震災で公園が防火帯や避難場所として大きな機能を果たしたのを機に状況が一変する。隅田、浜町、錦糸の3つの大公園と復興小学校に隣接した52の小公園を整備。東京市の井下清とともに指揮を執ったのが復興局の公園課長、折下吉延である。「震災復興公園」とも呼ばれた隅田公園は、隅田川の両岸にまたがり、桜の名所としても知られている。日本の都市計画並びに公園緑地、自然保護、国立公園事業等の先駆者として活躍した折下は、長年にわたり公園緑化に貢献した人を労う「折下功労賞」として今もその名を残している。



隅田公園本所側(旧状)(土木学会附属図書館デジタルアーカイブス所蔵)

日本の橋梁界、
鋼構造界の育ての親

田中 豊



隅田川に架かる多くの橋も震災によって崩落してしまった。田中豊は東京大学の教授の傍ら、復興局の橋梁課長として土木部長の太田圓三とともに隅田川六大橋(相生・永代・清洲・蔵前・駒形・言問)の建設に携わった。中でも永代橋の架橋場所は地盤が柔らかく、工事は難航を極めた。そこでアメリカから専門技師を呼び、当時最先端の技術だったニューマチックケーソン工法を採用。橋台と橋脚を海底下の岩盤まで掘り下げるといふ大工事を経て、永代橋を完成させた。土木学会で橋梁・鋼構造工学での優れた業績を表彰する「田中賞」は、田中豊に由来している。



関東大震災復興工事関係写真・永代橋工事(大正14年6月29日)(土木学会附属図書館デジタルアーカイブス所蔵)

東京から全国へ
インフラ整備を進める

春藤 真三



帝都復興事業の目玉となったのがインフラ整備である。復興計画には、土地区画の整理と同時に大規模な道路整備が行われた。急な坂の難所として知られていた九段坂もその一つだ。携わったのが震災を機に復興局の技師となった東大工科出身の春藤真三である。九段坂の改良工事では、坂の頂上をずらして急こう配を緩やかにし、道路を拡幅し、路面電車の軌道を道路中央部に移した。さらに地下には、電気やガス、上下水道などのライフラインをまとめる共同溝を設けた。その手腕が認められ、春藤は神奈川県土木部の課長などを務めた。



東京復興計画街路工事の進捗・九段坂改修工事「道路4(11)」道路協会1925年(国会図書館デジタルコレクション)

※顔写真は

折下吉延・田中豊「帝都復興史：附・横浜復興記念史第1巻」
春藤真三「水利と土木5(3)」より引用
(いずれも国会図書館デジタルコレクション所蔵)

【参考文献】

- 後藤新平研究会編著「震災復興 後藤新平の120日」藤原書店 2011年
- 東京今昔町あるき研究会編「隅田川の橋“水の東都”の今昔散歩」彩流社 2013年
- 五十畑弘「図解入門よくわかる 最新「橋」の科学と技術」秀和システム 2019年
- 「日本の都市公園」出版委員会編著「日本の都市公園-その整備の歴史-」インタラクシオン 2005年
- 松葉一清「帝都復興史」を読む」新潮社 2012年
- 伊藤孝「東京再発見-土木遺産は語る-」岩波新書 1993年
- 越澤明「復興計画 幕末・明治の大火から阪神・淡路大震災まで」中公新書 2005年